

実践事例.03

本当に学びたい分野を探しながら 一生をかけてキャリアをデザイン していく力を身につける

東京私立中村中学校・高校



副校長
永井哲明先生



キャリアセンター長
前岡克美先生

School Data

1909年創立／普通科、国際科／生徒数
女子687人(中学校322人・高校365人)
／進路状況(2012年度実績)大学80.0
%、短大5.7%、専門学校7.6%、就職0%、
その他6.7%

30歳の自分を考える キャリアデザイン

中村中学校・高校は中高一貫の私立女子校。2002年、当時進路指導部長だった永井哲明副校長が体系的なキャリア教育のプログラムを導入し始め、「キャリアデザイン」授業と名付けた。コンヒテンシー(総合的変化対応能力)の育成を目指し、掲げたテーマは「30歳の自分を考える」。以来、同校のキャリア教育の基本的な考え方は変わっていない。変わった点といえば、当時より進学実績はるかに上がったこと。大学進学希望者が多くを占めるようになり、キャリア教育に占める「学力向上」のためのプログラムの割合も増えた。

なぜ「ライフプラン」や「キャリアプラン」ではなく「キャリアデザイン」なのか。「プランは立てるとそれで終わってしまいます。立てたことで満足してしまうことも少なくない。でも、デザインはもっと芸術的でときめき感のあるもの。一生の間に何度でもデザインしていいし、自分の人生をデザインする力を身につけてほしいのです」と永井副校長は言う。

そして、なぜ「30歳」という問いに答えるのはキャリアセンター長の前岡克美先生。「本来、キャリアデザインとは一生のことですが、中高校生が70歳や80歳のことを考えるのは難しいと思い、まずは30歳を設定しました。女性にとって、結婚や出産、育児、また早い人では親の介護などさまざまなライフイベントが起り始める年齢。中学生から30歳の自分を意識し、いずれは広い視野で社会をとらえ、自分を見つめられる女性になってほしい」。

プランではないので、「30歳」を頂点としたワークシートに計画を書き込むようなプログラムを設けているわけではない。また、30歳の「仕事」を意識させ大学選びと職業を結びつけるような指導もしない。同校のキャリア教育のなかでは、大学選びもときめきのデザインのひとつ。興味でも資格でも職業でもどんな観点からでもいいから、しっかりと自分の意志で目的をも

って進学したい「分野」を選ぶよう指導している。

中1から高2までの5年間に 100本の作文を書く

同校では「キャリアデザイン」授業というの、進路指導と進学指導を併せたもののことを指し、大きな流れは図1のとおり。各学年ごとに目標を設定し、中高6年間をかけてじっくりと自分のキャリアについて考える。

中1の最初には、将来の夢と目標を名刺大の紙に書いてクラス全員分を模造紙に貼って廊下に貼り出す。これは毎年学年の始めに行うものだ。そのほか、「自分のことを理解しよう」「勉強ってなんだろう?」「職場体験」「職業研究」などを中学生で実施。スクールカウンセラーによるグループワークや、自己肯定や他者肯定に関する道徳的な授業もある。

同校では現在「100+1000プロジェクト」という学習プロジェクトを実施中

(図2)。その中に「100本表現」として、高2までの5年間に100本の小論文(作文)を書くという項目がある。国語科からは課題図書感想文、社会科からは社会科見学のレポートなど、各教科からさまざまな課題が出されるが、キャリアデザインの授業からもテーマが課せられる。例えば中学2年生へのテーマは「なぜ勉強するのか?」(図3)。これについては生徒だけでなく、一部の保護者も教員も書き、一冊の冊子にまとめる。「書くこと、そしてそれを他の人に知ってもらうことで自分の考えを再認識することが大切」と永井先生。こうして6年間でおよそ10冊の冊子が作られ、冊子にならないものは個々でファイリングし、自分の考えたことを可視化したり、他の人の考えも知って刺激を受けたりする。その積み重ねが、キャリアをデザインする力になっていく。

「大学名」や「偏差値」で 選ばないから中退者ゼロ

高校生になれば、文理選択や大学選択など進路を具体的に考えていく。ここで、同校がこだわっているのは「どの分野に進むのか」ということだ。「3年生のギリギリまで、どの学部(分野)に進みたいかを問いつけます」と永井先生。「キャリアデザイン」授業では卒業生のお話を聞く機会も何度か設けているが、難関な大学に進んだ卒業生を集めることなく、さまざま

取材・文／永井ミカ

図2 100+1000プロジェクト

100+1000プロジェクト ～努力の習慣・知識力・知識運用力を身につける～ ◆100分学習 ～努力の習慣～ 中1で毎日100分自宅学習 →高3で毎日360分自宅学習 ◆100冊ノート ～知識力～ 中1から暗記用ノート使用 →3年間で暗記用ノート100冊達成 ◆100本表現 ～知識運用力～ 中1から年間20本以上小論文(作文等)を書く →高2で100本達成 ◆1000語引き ～思考力につながる豊かな語彙～ 英語・国語それぞれで1年間に1000語の言葉を辞書で引く →6年間でそれぞれ6000語	
--	--

学力向上のなかでも、特に「努力の習慣」をつけることに力を入れている。

図3 「なぜ勉強するのか」(中学2年生で実施)より



図1 6年間のキャリアデザイン授業の流れ(学年別目標)

	実践目標
1年 (中学1年)	自己と自己の周辺を知る ～自己肯定から他者肯定へ～ ①自己理解(性格・興味・関心) ②自己理解(考え方の特徴) ③他者理解(性格・興味・関心) ④他者理解(考え方の特徴) ⑤社会へ目を向ける ⑥「働くこと」に関心を持つ
2年 (中学2年)	職業と社会の仕組みを知る ～職業観・勤労観の育成～ ①社会科見学 ②職業と勤労を知る ③職場体験 ④自分の適性を考える ⑤将来をデザインする ⑥自分の可能性を広げる
3年 (中学3年)	高校卒業後の進路を知る ～幅広い選択肢の把握～ ①職業研究 ②中学校卒業後の進路を絞り込む ③普通科・国際科を決定する ④文系・理系の選択 ⑤意思決定プロセスを意識する ⑥自己実現を意識した計画を立てる
4年 (高校1年)	大学卒業後の進路を知る ～労働市場情報・キャリア情報の理解～ ①自己理解(学問適性) ②自己理解(職業適性) ③職業観 ④将来の希望職業・職種 ⑤学部・学科研究 ⑥将来の希望学問分野
5年 (高校2年)	資格・技術・学部・学科を知る ～Competencyを意識する～ ①特別な資格・技術を求めるのか判断する ②教授の専門や 大学院の有無を調べる ③自分の適性と学問分野のマッチング ④自分の適性と資格・技術のマッチング ⑤学部・学科を 選択する ⑥授業選択科目の選定
6年 (高校3年)	自己実現に向け邁進する ～自主自律型学習者を目指して～ ①キャリアデザインを構築する ②受験校の情報を入手する ③教授の専門を調べる ④目標達成のための手段を考える ⑤密度の濃い学習計画を立てる ⑥向上心を持ち続ける

な学部を網羅することが優先だ。象徴的なのが、同校が学校説明会で使う『中村の学び』という冊子。大学合格実績が大学名ではなく分野別で紹介されて

いる。例えば、自然科学分野の中に「物理学 物理学」というくりがくりがあり、最後に記されているのが大学名。「生徒たちが悩みながら進路を決めていく順番と同じ

にしました」と永井先生。こんなコンセプトのもとに学ぶ生徒のなかには、どの分野に進みたいが常に自分に問い続け、どのような研究室があるのかなど知りたいことは個別に大学に直接電話をしてでも調べるといった者もいる。「大学に聞けばいいのだ」ということに、逆にこちらが気づかされませんでした。生徒が大学名や偏差値で選ばないので、当校の進学実績はなかなか上がりません。けれども、こしはばく大学中退者ゼロといううれしい報告が続いています」(永井先生)。進みたい分野が決まったら、担任とキャリアカウンセラー、そして、社会学系に進みたい生徒には社会科の教員がつくなど、複数でバックアップしていく。

「もし生徒の自発的な思いを待たずに学校の都合で大学や学部学科を勧めるのであれば、一生フオーするくらいの覚悟が必要でしょう。生徒が考え抜いて自分で選び、大学の最初の授業から『これがやりたい

かったんだ』と思ってスタート地点に立てることは本当に大切。キャリアデザインも勉強も、最終的には本人が幸せになるためにやることです。生徒たちのキャリアがこれから広く、深く、豊かになるように、と思っています」(永井先生)

実践のヒント

時間と手間をかけて必ず生徒に決めさせます

なかなかやりたい分野が決まらない生徒への指導は？

高2の11月には、第1志望校を決め、生徒自身が受験までのスケジュールを立てることになっていますが、もちろん決まらない生徒もいます。何度でも「将来どうしたいの？」と聞き、どうしても絞れないようなら「これだけはイヤというものは？」などと聞いていきます。担任は、キャリアサポーターや教科の先生たちとも連携してサポート。手間を惜しまないことだと思えます。(永井副校長)

校内でキャリア教育を推進したいが周囲の理解が得られない場合は？

担任をお持ちでしたら、まずは自分のクラスから。そして学年主任になったら学年に広げるというように、徐々に広がっていくのいいと思います。(永井副校長)